

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十七年十一月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十二卷第七号（通巻第一三九号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第139号

11. 2005

# 若女

品川 鈴子

七五三帯の端を以て笛袋

文化祭翁が彫りし「若女」

栗酒に開眼の面「若女」

ペットボトル掌に大師像菊日和



台風折れ 廃はい 仏ぶつ 毀きし 積やく 見し 榎

伊賀越えの花野隠れにゴルフ場

破れ芭蕉外人集ふ翁の忌

秋湿り墓の卒塔婆いかにせん

神功皇后の釣竿実る竹

玉砂利に入り乱れたる山わ車だ轍ち



# 玉 鈴

香川 松本 恒子

凌霄花のうげんの錠を忘れし窓守る  
新松子しんちり見つけ残り月見失ひ  
逆縁さか縁に生くる大儀を生身魂  
夕蝸ゆが一斉にやみ訃報入る  
朝曇りひとりおどろの柳道

愛媛 三浦 如水

星祀る地下街低きタイトルの天  
霧峠きり声だけ先に降りて来る  
芒の葉は鋼はねの色をして透けり  
団地族ビル屋上に門火焚く  
すりこ木で包丁叩きかぼちや割る

愛媛 三浦 澄江

水打ちて今日もつましく暮れてゆく  
両輪りょうりんの如く生き来て暑に耐える  
手短かに道を教へる白日傘

# 吟

愛媛 三枝 邦光

木偶こけの尉奈落に夏の休暇中  
日焼して定年教師の千枚田  
地曳ぢひ網あみたぐる日灼ひじりの力瘤  
接岸せつがんの甲板テッキにあふる日焼の子  
地藏会じざいの提灯ていとう明り試歩しほの先

兵庫 水野 範子

揚花火やうはな医師いしもナースも窓に寄り  
愛知博夕立明りの森ゴンドラ  
怠りの絵筆えびつに梅雨つゆの黴かび固く  
書道家しよだかも主婦しゆいの眼まなことなり秋刀魚あきづし選る

兵庫 三橋 早苗

冷房れいぼうの直下で寝息たてる猫  
水喧嘩みづけんか治ちまらぬまま閉会へいす  
脚湯あしゆには爺婆おやばもいる原爆げんぱく忌  
麻暖簾あさだかけて始まる饅頭屋まんどう  
汗あせかかぬ顔かほして締める白い帯

香川 宮原利代

強冷房肩のスカート草木染  
割り箸の杉の香ほのと宿涼し  
靴脱ぎて畳の冷や山の宿  
青嶺走す赤きバイクの郵便夫  
仁王像臍のくぼみや寺酷暑

和歌山 三輪 慶子

水着にて階段登る須磨の駅  
箱の丈計るごとくに蛸の足  
つけられし値札は知らず鱧の顔  
草丈に怯ゆるばかり終戦日

茨城 村上 和子

秋隣妣の数へに一步寄る  
遮断機が下りて炎天振りかぶる  
大粒の雨が西瓜を叩き割る  
禁煙の夫が金魚の水替ふる  
制服を浴衣に替へて彼を待つ

愛媛 師岡 洋子

もてなしの皿出す祭笛の宵  
射干を活けて人待つ奥座敷  
吾がくらし母のくらしや焼なすび  
のうぜんの昼を母来る杖の音  
見えてゐて墓山遠し初嵐

大阪 八木柊一郎

採尿の尿透き通る晩夏光  
杳として妻のこゑとも水鶏とも  
ひとところ風の道あり苧殻焚く  
秋蝶の棟をはなる修忌かな  
襤褸裂の水にしづみて秋暑し

東京 安田とし子

原爆忌水ふんだんに足洗ふ  
書くことの偶になりたる硯洗ふ  
鮎落ちて軒より暮るる庵かな  
穂草みな川に向きたる夕の風  
秋の果の届きて知己の沙汰を知る

# 薬草歳時記

(一三八) ヤマノイモ (漢名山薬)

大音悦子

薄暮にてとろゝの薯を播りみたり 山口 誓子

勤務先の近くにあの有名な谷中の墓地があり、そこから線路を越えて細い道をゆくと芋坂があります。

自然薯(ヤマノイモ)がこのあたりで採れたことによりこの名があると言われています。

芋坂は彰義隊がこの坂を駆け下りて、日光へ退出して行ったところであり、さらに、夏目漱石の「吾輩は猫である」にも登場します。

自然薯はつる性の多年草で雌雄異株。葉は対生か、まれに一部互生。葉の付け根(葉腋)に生じる小さな肉塊をむかご(零余子)と言います。

むかごをすり鉢に入れゴロゴロと手でかき回して皮をとります。水洗いしごはんに炊き込みます。芋の香りがほんのりしてむかごはんの出来上がりです。とてもおいしいです。むかごを地中に埋めておくと発芽し新しい苗になり

ます。

ヤマノイモの根は山薬といい、漢方では重要な生薬の一つです。根には粘液のグルコプロテイドの他アルギニン、コリン、ジアスターゼ、マンニトール、ジオスチン、マンナン、フィチン酸、サポニン類、タンニン、でんぷんなどが含まれます。

性味は甘・平。脾・肺・腎経に入り、健胃脾、益肺腎の効能があります。神農本草経によれば「虚弱体質を補つて早死にしない。胃腸の調子をよくし、暑さ寒さにも耐え、耳目もよくなり、長寿を保つことが出来る」とあります。八味地黄丸、啓脾湯などの構成成分です。

又、乾燥した根(山薬)二〇〇gを細かく砕き、グラニュー糖一五〇gと共にホワイトリカー一、八リットルに漬け、二〜三ヶ月後に漉し、一日三〇mlを就寝前に飲むと滋養・強壮によいといわれています(山薬酒)。

参考文献 「漢方医学大辞典」

「中薬大辞典」

「薬草カラー図鑑」

「原色牧野和漢薬草大図鑑」

著者略歴 神戶薬科大学卒 薬剤師

雄渾社

小学館

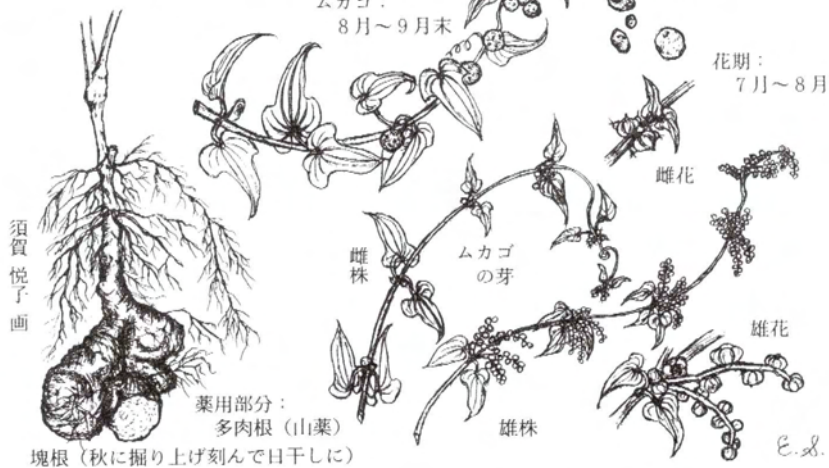
主婦の友社

北隆館

ヤマノイモ (ジネンジョウ) [ヤマノイモ属] (やまのいも科)

*Dioscorea japonica* Thumb.

山薯、山芋、自然生



山苞は蔓で結へし山の芋	刃をあてて切口あをき山の芋	この橋を自然薯掘りも酒買ひも	自然薯の身空ぶるぶる掘られけり	零余子蔓流るる如くかかりをり	むかごもぐ稀の閑居を訪はれまじ	音のして夜風のこぼす零余子かな	むかごこぼれて鶏肥えぬ草の宿	ほろくとぬかごこぼるゝ垣根かな	うれしさの箕にあまりたるむかご哉
鈴木 愛子	富安 風生	高野 素十	川端 茅舎	高浜 虚子	杉田 久女	飯田 蛇笏	村上 鬼城	正岡 子規	与謝 蕪村

ぐらつひ

# 鈴の奏

品川鈴子選

六十年経し軍帽を虫干しす  
兵庫 山口 博通

生きのびて六十回の終戦日

終戦日友幾人ぞ黄泉の国

老妻も白靴求め旅支度

巨船ぬつと現わる埠頭夏の霧  
東京 遠藤とも子

遠近の花火に屋上ひだり右

ダブリンの白夜の PAP のさんざめき

薔薇園も古城も駅も庭の内

滝垢離の草履脱ぎあり岩のかげ  
兵庫 中村 碧泉

切株の宿の木椅子に夕涼み

宿浴衣袴のごと身にそはず

過ぎ去りしこと話しつつ墓洗ふ

出番なく居場所もなくし登山靴  
兵庫 林 美智

新しき靴の痛さに大夕立

臍出しと茶髪に馴れし砂日傘

仏の間パイナップルの香り満つ

四万六千日海原へ手をあわせ  
兵庫 片山八重子

名城を住処となせり瑠璃蜥蜴

孟蘭盆会帝にとどけと平家琵琶

四十九日言ひたき事もかなかなと

自動ドア開けばわつと蝉のこ糸  
愛媛 田口たつお

幹の蝉ついと放ちし尿光る

涼風にからくり人形動きだす

場所変へし風鈴鳴りてよろこべり

浜木綿の香る道より水族館  
兵庫 小倉 綾子

洋風の家も葎實で囲ひけり

浜木綿や奇巖にあたる波しづき

万緑の磴ひたむきに兎がのぼる

打水の飛沫が跳る寺の庭  
兵庫 伊藤 公女

焦げ臭き地に伏し寝たる原爆忌

夕風に乗りて飛びくるシヤボン玉

坪庭に蝉の抜け穴四十余个

縫い針のぐいと曲りぬ日雷  
兵庫 本木下清美

花かぼちゃ 嫗の饒舌えんえんと



# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 史 あかり "

\* 選句は全て 品川鈴子

六十年経し軍帽を虫干しす

山口 博通

虫干しには仕舞い込んだまま忘れかけていたものが、白日の太陽に曝されるものですが、これは従軍時代の生死を共にした軍帽。六十年前の終戦で無事に引き揚げて来るまで、語り尽せぬ労苦の汗が滲み込んでよれよれだが、青春の貴重な記念品。

薔薇園も古城も駅も庭の内

遠藤とも子

薔薇の花園を一望にする古城、そこには悲喜こもごもの歴史がおう逸品も遺され、長い歳月を大切に受け継ぐお国柄。昔の貴族達はおそらく馬車を使い、時代に即して鉄道の駅まで専用についた。広大な領主の暮らし振りが偲ばれます。

宿浴衣袴のご身にそはす

中村 碧泉

旅先で浴衣に着替えると、道程の疲れもほぐれる筈ですが、宿浴衣は得てして糊が硬すぎ、無神経なアイロンで板のようにへばりついた袖など、腕も通し難いほどで、素肌

にはそぐわない。まるでしゃちこぼった袴の様で、「袴を脱ぐ」と云う気楽さにはなれず、やはり家庭のこころ遣いがなにより。

出番なく居場所もなくし登山靴

林 美智

若い頃はよく山に登った。若いとは、言えない齢になつてからもそれなりに登山靴を履いて山登りをしたものだ。でももう駄目。膝は痛いし、腰も長歩きに耐えられない。登山靴は出番をなくして靴箱に収納されていたが、今度の整理で居場所もなくなつてしまったよ。登山靴の行く末に我が身を重ねて居られるのかも。

四十九日言ひたき事もかなかなと

片山八重子

淋しさが胸をうつ。なぜ先に逝つてしまったの？という恨みから、お葬式の様子、法事の段取り、親戚つきあいのむずかしさ、これからの身の処し方等々、言いたい事は山程あるけれど、もうすっかりはかないことである。一人座す夕闇せまる座敷には蝸のかなかたと鳴く声が聞こえるばかりだ。

涼風にからくり人形動きだす

田口たつお

からくり人形は江戸中期、今から二百年位前から作られるようになった。山車からくりと座敷からくりに大別される自動人形、木製ロボットである。日本のからくり人形は西洋のものと違い、能の影響を受け抽象化された動きをするのが特徴である。涼風に動き出したのは茶運び人形だろうか。暑い夏を昼寝などで家に籠もっていた人々も折からの涼風にさそわれて動きはじめる時でもある。

万緑の磴ひたむきに児がのぼる

小倉 綾子

万緑という季語は草田男のへ万緑の中や吾子の齒の生えそむるを創始とする。見わたすかぎり緑一色、子供の生命力の象徴としてゆるがない。おばあさんに連れられてお寺にお参りにきた三才位の幼児が長い燈をひたむきに登っていく姿が見える。子供がひたむきにも向き合う姿にはいつも感動をおぼえさせられる。

焦げ臭き地に伏し寝たる原爆忌

伊藤 公女

原句はへ焦げ臭き地に伏し眠た日原爆忌であったが編集部より送られてきたはがきには、「眠た日」に先生の添削が入り掲句のように改善されていた。作者の実体験の回

想句かも知れない。核兵器に抗議する集会では、参加者が地面に横たわり死体の類似体験をする「ダイイン」という抗議方法もある。染み込んだ臭覚からなる反戦反核の句。

盆とんぼすいと横切る雨情の碑

本木下清美

野口雨情は茨城県出身の詩人で「波浮の港」や童謡「七つの子」「青い目の人形」「十五夜お月さん」などでも有名。素朴で哀愁がただよう。北茨城の他日本あちこちに碑が建てられている。作者が見られたのはどこの碑だったろう。雨情の碑の前をとんぼがすいと横切っていた。折から盆のお参りにきたようにも感じられた作者。

かなかなに捻挫し能勢のけもの道

島 純子

能勢は、能勢妙見山があるところ。能勢電終点の妙見口よりケーブル、リフトを乗り継いでいく楽な方法もあるが、六六〇メートルといえども歩けば結構きついコースだ。まだまだ山深いけもの道もある。蝸の妙なる音色に心奪われて足許がおろそかになり、躓いて転び足を捻挫してしまつたよ。日暮れも近づいて来たのに。けれどかなかなを恨む気持ちにはなれない。(以下略)